

# 上方古典落語「高津の富」「くしゃみ講釈」における方言の特徴について—師匠から弟子、孫弟子へ—

安井 寿枝  
関西外国語大学

## キーワード

『上方はなし』, 原因理由の表現, 断定の表現, 敬語の表現

## 要旨

松鶴十種といわれる「高津の富」では、原因理由の表現において、師匠の使用する方言形が弟子には継承されているが、孫弟子には継承されていない様子が示された。ただし、孫弟子は異なる方言形で師匠らしさを表現していた。断定の表現においては、「高津の富」「くしゃみ講釈」ともに、師匠の使用する方言形は弟子のみに継承され、孫弟子は役割語として異なる方言形を使用していることが確認できた。敬語の表現においては、テヤを弟子のみが継承している様子が示された。

## 1. はじめに

古典落語は明治期以前にできたものだとわれ<sup>1</sup>、上方落語の最盛期は明治中期だといわれている<sup>2</sup>。明治から大正時代に演じられた落語の中で使用されている方言の特徴をまとめたものとしては、SPレコードを調査した金澤・矢島編（2019）や村中（2020）などがあるが、先行研究の多くは全体的な特徴から地域差や時代差を述べるに留まる。しかし、落語はあくまでも創作物であることから、演目内で使用されている方言には、大阪らしさや古めかしさを演出するために使用されているものと予想されるため、自然談話との違いを考慮し、どのような方言形が演出として選択されているかを考察する必要がある。さらに、落語は師匠から弟子に口承されるため、方言の選択には師匠らしさも介在する。そこで、本稿では、師匠から弟子にどのような方言形が継承されているかを確認し、その上で、どのような方言形が演出となり得るのかを示すため、落語の速記本『上方はなし』に収められている古典落語「高津の富」と「くしゃみ講釈」を資料として、師匠、弟子、孫弟子、それぞれの方言の使用実態に注目する。

## 2. 資料について

『上方はなし』は、竹村（2021：230）の概説によれば、「昭和11年（1936）4月から昭和15年（1940）10月にかけて全49集発行された上方落語に関する同人誌」で、「一番の目玉は5代目松鶴が口述した速記落語である」とされている。安井（印刷中）では、『上

方はなし』に収められている7演目<sup>3</sup>とNHKアーカイブスに公開されている1990年代、2000年代に演じられた同演目の音声落語を比較して、四半世紀を経て方言がどのように変化したかを述べた。速記本と音声落語を比較すると、使われなくなった方言形と使われ続けている方言形があり、使われ続けている方言形の中には、時代とともに使用が増加したものもあることが示された。使われなくなった方言形は、ヤヘン・ゴワス・ヤハル・テヤであり、使われ続けている方言形は、ナラン・イカン・イデ・ナンダである。時代とともに使用が増加した方言形は、サカイ・アカン・ジャ・ダスの転訛形・ナハル・オ〜ヤス・オオキニ・ワシであった。使われなくなった方言形は、自然談話で使われなくなるのと同時に消えていったものだといえるが、古い方言形から順に消えていくわけではないことが示された。使われ続けている方言形の中にはナンダやナハルのように、使われなくなった方言形よりも古形のものがある。つまり、古典落語に使用されている方言は、かならずしも舞台となっている時代や、演じられた時代の実際の方言使用を映し出しているのではないといえ、特定の方言形が創作物で使用する方言として、取捨選択されて使用されるようになったと考えられる。このような現象を安井（印刷中）では「方言の形式化」と呼んだ。ただし、安井（印刷中）では、師匠の使用する方言形が色濃く継承される様子もみられた。たとえば、原因理由の表現において、5代目松鶴が筆記したと明記されている「高津の富」と、弟子である2代目笑福亭松之助の音声落語はともにノデを多用しているが、他の演目や異なる門下の落語家が演じた音声落語の場合、サカイを多用していることが示された。このことから、古典落語の方言は、時代とともに変化するものの、特定の方言形は師匠から弟子に色濃く継承される可能性が考えられる。そのため、本稿では、師匠と弟子で方言の継承が色濃くみられた「高津の富」と、孫弟子2人の音声資料が存在する「くしゃみ講釈」の2演目に注目して、5代目松鶴の速記本<sup>4</sup>と、弟子である2代目松之助の音声落語、孫弟子である3代目仁鶴と6代目松喬の音声落語とを比較し、古典落語における方言の継承と時代の影響を示したい。扱う音声資料は以下のとおりである。

「高津の富」

- ① 2代目笑福亭松之助（「日本の話芸」2001年2月17日放送）<sup>5</sup>
- ② 6代目笑福亭松喬（「第5回松喬十八番落語会」1995年5月15日）<sup>6</sup>
- ③ 6代目笑福亭松喬（「第5回東西三人会」1997年10月14日）

「くしゃみ講釈」

- ④ 3代目笑福亭仁鶴（「日本の話芸」1995年12月22日放送）<sup>7</sup>
- ⑤ 6代目笑福亭松喬（「第9回松喬独演会」1997年10月31日）

2代目松之助は5代目松鶴の弟子である。1948年に入門したが、5代目松鶴が1950年に亡くなったため、4代目桂米團治の教えを受けるとある<sup>8</sup>。さらに、米團治も1951年に亡くなったため、『上方はなし』が教科書のようにになっていた可能性が、6代目松鶴と3代目

米朝の対談に示されている<sup>9</sup>。3代目仁鶴と6代目松喬は、6代目松鶴の弟子である。

### 3. 原因理由の表現について

矢島（2013：427）には、「くしゃみ講釈」においてノデが多用されていることが示されている。安井（印刷中）では、速記本「高津の富」においてもノデが多用されていることを示した。そして、「高津の富」の音声落語では、弟子の松之助がノデを多用し、異なる門下の落語家はカラとサカイを多用していること、「くしゃみ講釈」の音声落語では、異なる門下の落語家がサカイを多用していることを示した。そこで、以下では、本稿で扱う資料において、速記本でノデが使用されている箇所<sup>10</sup>に該当する部分を確認する。対応をまとめたものが表1・表2である。すべての音声落語に該当する部分がない場合は抜き出さず、一部の音声落語に該当する部分がない場合は斜線を入れた。

表1 「高津の富」のノデ

速記本（1940）	①松之助（2001）	②松喬（1995）	③松喬（1997）
引かんならんと云ふ <b>ので</b>	引っ張んならんとい <b>うので</b>	泊まっていたきた <b>い</b> とい <b>いますので</b>	泊まってもらわ <b>ない</b> かん <b>というので</b>
雪駄を履いてます <b>ので</b>	雪駄を履いてます <b>ので</b>	雪駄を履いてる <b>で</b>	雪駄を履いてる <b>で</b>
取引で出て来た <b>んで</b>	出てきたんじゃが	取引で出てきました	取引で出てきました
貧弱 <sup>みすぼらし</sup> い風体 <sup>なり</sup> を仕て居る <b>ので</b>	みすぼらしい成りを <b>して</b> んで <b>ので</b>	みすぼらしい格好を <b>して</b> る <b>で</b>	みすぼらしい風をし <b>て</b> る <b>で</b>
ワア〜と云ふてる <b>ので</b>	騒がしい <b>ので</b>	わあわあ、わあわあ騒 <b>い</b> でる <b>で</b>	わあわあ、わあわあ騒 <b>い</b> でる <b>で</b>
割木を持てる <b>ので</b>	割木を持って騒 <b>い</b> でる <b>ので</b>	割木、向こう鉢巻きじ <b>ゃ</b>	割木、向こう鉢巻き
開けに出る者が <b>ない</b> の <b>で</b>	開けに出よらん	よう開けよらん	開けよらん
持悪 <sup>にく</sup> い <b>ので</b>	持ちにく <b>う</b> ございま <b>す</b>	持ちにく <b>う</b> ございま <b>す</b>	持ちにく <b>う</b> ございま <b>す</b>
宜い物と云ふた <b>ので</b>	良いもんを <b>と</b> 言うた <b>んで</b> な	良いもんは <b>ご</b> ざり <b>ま</b> せんか <b>と</b> こう <b>言</b> う <b>で</b>	良いもんは <b>ご</b> ざり <b>ま</b> せんか <b>ち</b> ゆう <b>て</b>
減る <b>ので</b>	減るの <b>や</b>	ないの <b>じゃ</b>	ないよ <b>う</b> になる
会計が立ちません <b>ので</b>	暮らしが立ちません <b>ので</b>	や <b>っ</b> ていけん <b>も</b> んで	や <b>っ</b> ていけん <b>も</b> んで
用事がある <b>ので</b>	用事がある <b>ので</b>	用足しに	用足しに

久し振りの富やと云ふ <b>ので</b>	久しぶりの富やとい <b>うのでからに</b>	久しぶりの富くじと <b>いうので</b>	久しぶりの富くじと <b>いうので</b>
お告げがおました <b>んで</b>	お告げがおましてん	お告げがあった	お告げがあった
声をする <b>ので</b>		声をする	声をする
銭が無い <b>ので</b>	銭がない <b>ので</b>	銭がない <b>さかい</b>	銭がない <b>さかい</b>
金が無い <b>ので</b>	金がない <b>ので</b>	金がない <b>さかい</b>	金がない <b>さかい</b>
ごて〜言ふた <b>ので</b>	違う <b>ので</b>	ごてくさごてくさと 言いくさって、せやよ <b>ってに</b>	ごてくさごてくさと 言いくさって、せやよ <b>ってに</b>
余り嬉しい <b>ので</b>	あまりのうれしさに	あまりのうれしさに	あまりのうれしさに

表2 「くしゃみ講釈」のノデ

速記本 (1940)	仁鶴 (1995)	松喬 (1997)
読物が宜い <b>ので</b>	三拍子揃うてて	出しもんが面白いちゅう <b>ので</b>
おもやんにベツタリと逢ふた <b>んで</b>	べったりと会うたんや	べったりと会うた
怪太糞が悪い <b>ので</b>	腹立つやら	けったくそ悪い <b>さかい</b>
物覚えが悪いときてる <b>ので</b>	わたいが物覚え悪い <b>さかい</b>	あいつがいらちや <b>さかい</b>
其様な時分に行た事がない <b>の で</b>	わたい生きてへん <b>さかい</b>	生まれてまへんがな
嚏が出ると云ふた <b>んで</b>	くっしゃみが出る言うて	くしゃみが出る聞いてきた <b>さ かい</b>
モヤ〜と来ました <b>ので</b>		ひゆるひゆるとやってきよつ た
皆は気の毒と云ふ <b>ので</b>	皆気の毒やちゅうて	皆は気の毒や、気の毒や言うて
胡椒が無い <b>ので</b>	胡椒がない <b>さかい</b>	胡椒がない <b>さかい</b>

表1を確認すると、弟子である松之助は師匠と同じくノデを多用していることがわかる。一方で、孫弟子である松喬はノデではなくデを多用している。また、表2においては、孫弟子である仁鶴と松喬はともにサカイを多用していることがわかる。つまり、「高津の富」に一門の特徴が現れているといえ、師匠の特徴であるノデを弟子はそのまま引き継いだ、孫弟子である松喬はデに変更しているということになる。これは、ノデが共通語形と同じであるから、方言らしさを演出するためにデに変更したと考えられる。金沢(2000:153)では、大阪方言で「大正～昭和においては、(多分、拮抗期を経た上で)徐々にサカイ系がヨッテ系を圧倒してきたものと考えられるのではないだろうか」とされていることから、

本来、大阪らしさを演出するのならば、「くしゃみ講釈」と同様に「高津の富」においてもサカイが選択されるはずである。しかし、サカイでは 5 代目松鶴らしさは消えてしまう。一方で、ノデは共通語と同じ語形であるため、上方落語らしさは表現されない。そこで、選択されたのがデである。李（2012）には、三重県松阪市・津市に原因理由のデの分布が示されている。このように、「高津の富」では、松鶴らしさと方言らしさを演出するために、大阪周辺で実際に使用されていた方言形デが選択されたと考えられる。

#### 4. 断定の表現について

安井（印刷中）では、普通体は上手の人物ほどジャを使用するようになること、丁寧体は音声落語全体と通してダスの使用が減り、使用される形式がすべて転訛形に変更されていることを示した。「高津の富」では、自称金持ちの男が上手の人物となる。年齢は 50 代後半とされている。「くしゃみ講釈」では、知恵を貸す男が上手の人物となる。年齢は不詳だが、下手の人物と同世代だと推測される。彼らの使用を確認すると、以下のように速記本でヤを使用していた箇所にはジャを使用している例がみられる。用例は、速記本を a、弟子の音声落語を b、孫弟子の音声落語を c とし、音声落語には括弧内に資料番号を付している（以下同じ）。

- (1) a あかんもんやで  
b あかんもんやないか (①)  
c あかんもんじゃな (②③)
- (2) a 当つてからの事や  
b 当たつてからの話やがな (①)  
c 当たつてからの話じゃ (②③)
- (3) a 今度此处へ講釈の新席が建つたんや  
c 講釈場にやり直したんじゃ (④)
- (4) a それはくさゝれてのんやがな  
c 笑われてるのんじゃ (⑤)

(1) (2) では弟子である松之助は師匠と同じヤを使用しているが、孫弟子はジャを使用していることがわかる。これは、安井（印刷中）の結果と同様に、上手の人物を〈老人語〉を話す人物として演出していった結果だといえよう。

次に、丁寧体について確認すると、本稿で使用する資料においてもダスの使用が少なくなっていることが確認できる。以下がその例である。

- (5) a 一ツお願ひが出来ませんもんだすやろか  
b 一つご無理願えんもんでっしゃろかな (①)

- c 一枚お買い上げ願えまへんやろか (②)
- c 一枚お買い上げ願えんもんでおまっしゃろか (③)
- (6) a 甚い人だすなア
- b えらい人でんな (①)
- c えらい人でございまんな (②)
- c えらい人だ (③)
- (7) a 何をだんね
- c なんだんねん (④⑤)

(5)(6)では、速記本でダスの使用されている箇所が、異なる丁寧体の転訛形か、ダスの転訛形になっていることが確認できる。(6c)で使用されているダは、共通語形のダのようにみえるが、同じ資料内で「わたいも当たりま」とマスの転訛形を使用していることから、ダスの転訛形だと考える<sup>10</sup>。(7)では速記本と同じダスの転訛形が使用されているが、仁鶴と松喬がともに「なんだんねん」を使用していることから、「なんだんねん」が固定化した形になっていると予想される。

## 5. 敬語の表現について

安井(印刷中)では、ナアルがナハルに変更されていること、音声落語でテヤを使用するのが松之助のみであることを示した。そこで、以下では、本稿で扱う資料において、速記本でナアルとテヤが使用されている箇所に該当する部分を確認する。以下がその例である。

- (8) a 貴方も買ふてなあるのか
- b あんたも買うてる (①)
- c あんた買うてなはるか? (②)
- c あんた買なはったか (③)
- (9) a 何も食べんと寝んね仕な一れ
- b 何も食べんと寝んねしなはれ (①)
- c 何も食べんと大人しい寝んねしなはれ (②)
- c 何も食べんと大人しい寝んねしなはれちゅうねん (③)
- (10) a 盗人を掴へた様に云ふてなアる
- c 盗人みたいに言うてなはんな (④)
- c 盗人捕まえたみたいに言なはんな (⑤)
- (11) a どないしてとやつたんや
- b どないしててやってん (①)
- c ほんでどうしよ (②)

c. ほんまにどうしよ (③)

(8)～(10)を確認すると、ナルはすべてナハルに変更されていることが確認できる。テヤにおいては、孫弟子である松喬は使用していないことが確認でき、音声落語全体を通して松喬にテヤの使用が見られないことから、孫弟子の代になって使用されなくなった方言形だといえる。

## 6. 師匠から弟子・孫弟子に継承される方言形

師匠から弟子・孫弟子にどのような方言形が継承されているかを、原因理由の表現、断定の表現、敬語の表現に注目して再確認する。

原因理由の表現においては、師匠が多用しているノデを弟子は多用しているが、孫弟子は多用していないことが確認できた。とくに、「高津の富」の速記は5代目松鶴自らが筆記したと明記されていることから、ノデが5代目松鶴の特徴だといえるが、その特徴を孫弟子は継承していないことが示された。ただし、孫弟子である松喬が「高津の富」においてはデを多用し、「くしゃみ講釈」においてはサカイを多用していることを鑑みると、「松鶴十種」で「一字一句おろそかにせずと松鶴師が書き上げられたもの」<sup>11</sup>といわれる「高津の富」では、少しでも師匠らしさを演出するために、ノデと近い形式であるデをあえて多用していると考えられる。本来師匠らしさを演出するのであれば、ノデを多用すべきであるが、ノデは共通語形と同じであるから、上方落語らしさを演出するためにはノデを避けざるを得なかったのであろう。そのため、師匠らしさを演出する必要のない「くしゃみ講釈」においては、自然談話の影響を受けてサカイが使用されるようになっている。

断定の表現では、上手の人物に注目すると、普通体において、師匠と弟子がヤを、孫弟子がジャを使用していることが示された。落語において上手の人物は「侍」「知識層」「年長者」が多いことから、〈武士ことば〉〈老人語〉の役割語としてジャが使用されるようになったと考えられる。また、丁寧体においては、弟子と孫弟子ともにダスの使用が減っていることが示された。ダスは「かつては大阪弁のいちばん特徴的な言い方とされていたが、船場では中流以下の商人が使うことばであったという。現在では使う人が少ない。こうした言い方は、市内の中年層以下の人間にとっては年輩の商売人のごとばというイメージがある」(郡(1977:43))とされていることから、自然談話で使われなくなったために落語でも使われなくなったといえる。さらに、『〈役割語〉小辞典』の「ダス」の項目(119-120)で「だっか」「だっせ」「だんねん」「だっしゃろ」を例に示して、「いわゆる「こてこての大阪弁」の典型的な形式」とされていることから、古典落語において、大阪らしさや古めかしさを演出する形式として、ダスの転訛形のみが継承されるようになったと予想される。このように、断定の表現においては、普通体・丁寧体ともに孫弟子の使用には役割語としての使用が確認できることから、孫弟子が入門した1960年代以降<sup>12</sup>には役割語のステレオタイプが浸透しており、そのステレオタイプが孫弟子の方言選択に影響していると考え

られる。

敬語の表現では、弟子と孫弟子ともにナルを使用しなくなっていること、テヤを弟子のみが使用し、孫弟子が使用しなくなっていることが示された。ナハルもテヤも自然談話で使用されなくなったが故に、孫弟子の代で使用されなくなっていると考えられる。「高年齢層には、「ハル」の一時代前の形である「ナハル」を使う人がいる。また、明治期までは、「…テジャ」「…テヤ」という、「テ」を使った敬意表現が広く用いられていたようである」（郡（1997：41））とあることから、ナルはナハルよりもさらに古形であるから弟子も使用していないと予想される。

## 7. おわりに

落語の方言は、弟子が師匠らしさを継承しようとする一方で、演じる時代に応じた演出を施していることが示された。師匠らしさを重視するか、時代に応じた演出を重視するかは、演目によって異なる。さらに、現在演じられている上方古典落語には、大阪らしさや古めかしさの演出に、自然談話の影響と役割語のステレオタイプが影響していることも示された。そのため、落語における方言の特徴を考察するためには、これらのことを考慮する必要がある。今回の調査では、5代目松鶴の弟子である6代目松鶴を扱うことができなかった。5代目松鶴と6代目松鶴の方言の使用実態については、稿を改めたい。

### 【注】

- 1 「落語辞典—落語はじめの一步—」による。
- 2 「落語（らくご）って？」による。
- 3 「住吉駕籠」「葎の火」「三枚起請」「お玉牛」「高津の富」「宿屋仇」「くしゃみ講釈」である。
- 4 お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション TeaPot に公開されている原本を使用した。
- 5 NHK アーカイブス学術利用トライアル 2022 年度後期公募に採択され、閲覧したものである。
- 6 6代目笑福亭松喬の音声落語は、すべて「六代目笑福亭松喬落語公式チャンネル」による。
- 7 注5と同じ。
- 8 4代目桂米團治は『上方はなし』の筆記に多く関与したとされている。
- 9 「対談「上方はなし」の時代」（三田編（1972））による。
- 10 郡（1997：43）にも大阪方言の丁寧体として「ダス」と「ダ」が併記されている。
- 11 復刻版『上方はなし』の「編集後記」に「松鶴十種の内「高津の富」として、松鶴師が三年間とっておきの至宝篇を出してもらいました。一字一句おろそかにせずと松鶴師が書き上げられたものです」（p.273）と書かれている。
- 12 3代目仁鶴の入門が1961年、6代目松喬の入門が1969年である。

## 【参考文献】

- 金沢裕之（2000）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 金澤裕之・矢島正浩編（2019）『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院
- 金水敏編（2014）『〈役割語〉小辞典』研究社
- 郡史郎（1997）「I 総論」『日本のことばシリーズ 27 大阪府のことば』明治書院
- 五代目笑福亭松鶴編（1971）『上方はなし 下 第二十七～第四十九集』三一書房
- 竹村明日香（2021）『『上方はなし』について—近代大阪方言の速記落語—』『コーパスによる日本語史研究 近代編』ひつじ書房 pp. 229-250
- 三田純一編（1972）『別冊『上方はなし』解説』三一書房
- 村中淑子（2020）『関西方言における待遇表現の諸相』和泉書院
- 矢島正浩（2013）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院
- 安井寿枝（印刷中）「上方古典落語における方言の形式化—速記本『上方はなし』と音声落語の比較を例に—」『方言の研究』10号、日本方言研究会
- 李响（2012）「大阪・奈良・三重における原因・理由を表す接続助詞「から」」『近畿地方中部域の言語動態—大阪・奈良・三重近畿横断 GG 調査から—』徳島大学日本語学研究室 pp. 127-130
- 「上方はなし」お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション TeaPot（最終閲覧日 2023年8月13日）
- URL  
[https://teapot.lib.ocha.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search\\_type=2&q=2217](https://teapot.lib.ocha.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=2217)
- 「落語辞典—落語はじめての一步—」『公益社団法人 落語芸術協会』公益社団法人 落語芸術協会（最終閲覧日 2024年3月26日）
- URL [https://www.geikyo.com/beginner/dictionary\\_detail.html#kotenrakugo](https://www.geikyo.com/beginner/dictionary_detail.html#kotenrakugo)
- 「落語（らくご）って？」『ワッハ上方』大阪府上方演芸資料館ワッハ上方（最終閲覧日 2024年3月26日）
- URL <https://wahha-kamigata.jp/about/rakugo/>
- 「六代目笑福亭松之助 落語公式チャンネル」YouTube（最終閲覧日 2023年8月13日）
- URL <https://www.youtube.com/@user-ce7ch1ks4k>

## 【付記】

本稿は、同志社国語学研究会第575回研究会（2023年8月23日、於・同志社大学）で発表した内容に基づくものである。また、本稿はNHK番組アーカイブス学術利用トライアル2023年度後期公募に採択され、閲覧した資料を利用している。